

## 第280回山口西田読書会(=2021年7月31日開催分)のプロトコル

担当:末永

### 【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、219頁13行目から220頁14行目まで  
(=「場所(一)」の第8段落)

### 【テキスト要約】

「場所」論文の第8段落冒頭では、「ラスクの所謂対立なき対象」(同書、217頁)、すなわち「超対立的対象」〔≡「判断内容の真・偽を決定する標準として、それ自体は真偽・主客の対立を超えており、それゆえに判断彼岸的であり、したがって認識を超越している」もの〕について、再び言及がなされる。「全然意識の野を超越したもの」とラスクが考える自立的対象さえ、われわれの「認識対象」となる以上〔≡認識主観の中に映し込まれて認識作用の目的となる以上〕、「場所といふ如きに於ける意識の野」(同書、219頁)の外にあるのではなく、むしろこれによって裏付けられているはずだと、西田は主張する。

同段落の以下の論述では、「所謂意識〔≡唯心論的形而上学へと到るような、対象化せられた意識〕」(同書、219頁)と、「所謂意識」をも映す「真の意識」(同書、220頁)の区別が導入される。それによって、「対立なき対象」は、ラスクも含めた「所謂意識の立場」(同書、219頁)においては、たしかに「意識の野の外に超越する」ように見えるのかもしれないが、西田のような「真の意識〔の立場〕」においては、やはり「かかる対象も何かに於てあらねばならぬ」(同書、217頁)と考えざるをえないと、西田の自説が繰り返される。ではなぜ、ラスクの「超対立的対象」のような発想が出てくるのか。

「所謂意識」とは、いわばカッコつきの『於てある場所』である。言い換えると、「有に対する無」(同書、220頁)であるがゆえに、「尚一種の有」、「一つの潜在的有」(同書、220頁)であるような「対立的無」(同書、220頁; cf. 同書、224頁)である。これは、先に問題になった「変化の場所」、すなわち「限定せられた類概念」(同書、220頁; cf. 同書、118, 219頁)と表現され、潜在性を含んだ働きを容れると同時にそれ自体が「一種の潜在有」(同書、220頁)であるような「対立的なる無」である。有との徹底した対立によって、すなわち有の限りない否定によってのみ成り立つ「無の立場」(同書、220頁)に立つことは、この立場に身を置く者にとっては、「有に対して無其者が独立する」(同書、220頁)ことを意味する。無の側の此岸への超越が、翻って有の側に彼岸への超越という(仮想的)動性を生みだし、これが、一切の認識作用を超えた「超対立的対象」という発想へと繋がるのである。

それに対して、西田の考える「真の意識」とは、「真の無の場所」(同書、220頁)という意味での「於てある場所」である。言い換えると、「如何なる意味に於ての有無の対立をも超越して之を内に成立せしめるもの」(同書、220頁)、有と無とを包み、有の背景を成す「真の無」(同書、218, 220, 223頁)となった「場所」である。西田の言い方では、これは「類概念的なものを破った所」(同書、220頁)に開かれるもの、そこに於いて或物がその矛盾へと移り行くことができるようになる「生滅の場所」であり、「矛盾其者を見る意識の野」(同書、221頁)である。ところで、「矛盾其者を見る」とは、矛盾を見ることによって矛盾なく物事を考えることができるようになるということ、つまり、判断内容の真偽を決定する「標準」〔≡物事を矛盾なく正しく考えさせる究極の真理基準〕としての「超対立的対象」をも「見る」ことを意味する。西田に言わせれば、「超対立的対象」を真に見させるのは、「矛盾其者を見る意識の野」としての「真の無の場所」

に他ならない。こういう仕方では、西田は、ラスク的な「超対立的対象」という考え方がどこからどのように生じて来るのか、また実際はどうなっているのかを、自らの「場所」概念に基づいて説明しようとするのである。